

Uncle Remusについて

前 島 清 子

その一

数年前に日本に来て子供達の心を楽しませた Disney の手による映画 Song of the South (「南部の唄」) の原作 Uncle Remus をふとしたことで手に入れてから、毎晩勉強や仕事に疲れるとこれを読むのが日課のようになつた。私はいつのまにかこの本の中の男の子となつて黒人Remusの語る話に聴き入る。始めは読みづらく思つた黒人訛の英語も、幾度か音読するうちに慣れて大体わかるようになつて来ると、次第に読むのが楽しみになつた。黒人の持つ humor と sentiment が物語の中に感じられ、合の手のようにはいる男の子の質問が物語を生きと読者的心に印象づける。

この物語の著者 Joel Chandler Harris は Mark Twain や Bret Harte 等と凡そ同時代の人で、南北戦争後の地方色文学をなした作家の一人であり、彼の描く南部ジョージアの黒人達は他にその比を見ないものである。一流作家の列には加わらないが、黒人を文学的に扱つた作家としては忘れられぬ存在である。ここで取り上げる Uncle Remus 物語によつて彼は多大の人気を博したが、その四年後、1884年に出了 Mingo; and Other Sketches in Black and White の中に、彼は黒人達の姿を真によく写し出している。これは、Harris が事実に忠実であることを第一としたことと、奴隸制度下および解放後のジョージアの黒人を実際によく知つていたこととに起因するのである。

Harris は 1848 年に、南北戦争の戦場となつたジョージア州の小さな町に生まれ、貧困の中に成長した。少年の頃、近所の黒人達から色々の物語を聞いた。数年間、マイコン (ジョージア中部の工業都市)、ニュー・オルリ昂ズ、サバナ (ジョージア東部の海港) 等で新聞社に勤めた後、1876 年、二十八才の時、ジョージアの首都アトランタ市の Constitution 紙の記者に迎えられた。やがて、少年時代に黒人達から親しく聞いた Brer (=Brother) Rabbit の物語を黒人訛の英語で同紙に載せ始めたが、それが Uncle Remus 物語のはじまりである。新聞に出るとこの話は大評判になり、1880 年には Uncle Remus, His Songs and His Sayings と題する本となつて出版された。その後 Uncle Remus の物語を専門とする声が高くなつたので、Harris は次々に黒人に伝わる動物

の物語を書き、遂に六十二の物語を Nights with Uncle Remus: Myths and Legends of the Old Plantation という題で 1883 年に本にして出した。かくして Uncle Remus の物語は全部で十冊となつた。この他にも、すでに述べたように、南部を舞台として小説も書いたが、Uncle Remus の名は広く外国にまで知られるに至つた。Remus ファンの中には、時の大統領 Theodore Roosevelt (1858—1919) 一家もあり、Harris はホワイト・ハウスへ招かれたこともあつた。この冗談の好きなやさしい心を持つた Harris は無数の子供達に親しまれて、1908 年に世を去つた。

ジョージアの農園に伝わる黒人の物語の中には、他の国の民話、童話に似通つたものがいくつかある。これらの民話がアメリカ南部の黒人に何処から伝わつたかについては定かでない。アメリカ北部のインディアンの間にも、又南アメリカのアマゾン流域のインディアンの間にも、似た物語が伝わつてゐるといふ。しかし、アフリカから黒人の奴隸と共に伝わつて来たのがもとであると考えられる。伝えられている間に、如何にも黒人らしい色彩を帯びて來たのである。Uncle Remus の中に、二、三個所、作者の註もあるが、民話や童話は、話す相手、その年令、境遇、場所に応じて、相手によくわかるように話は變つて行くことが多いので、話の心理は同じでも、登場人物等が變つてくるのである。

物語をする Uncle Remus に、Harris はありのままの黒人の姿を示している。奴隸廃止の口火となつた Stowe 夫人の有名な著書 Uncle Tom's Cabin は同じく黒人を扱つているが、その主人公 Uncle Tom は理想化された黒人である。これは定まつた目的をもつて書かれたものであるから黒人 Uncle Remus と比較するべきではないが、南部農園の黒人達と同じわり、その生活、性質を十分に知つてゐる Harris の作品は、物語をする黒人そのものの姿を彷彿とさせる。黒人の物の考え方、信仰、純真さ、長年奴隸として暮して來た者の持つ感情等が、民話と民話の間に滲み出でている。男の子が毎晩のように「リーマスじいや」の話を聞きに来る。その折々に Uncle Remus のしている仕事や表情や男の子への言葉によつて、黒人 Uncle Remus は如實に描き出されている。

Uncle Remus の語る話の主人公は一匹の兎である。何故動物の中でもかよわい鬼を主人公にしたかについては、Harris 自身次のように Introduction に書いている。

At least it is a fable thoroughly characteristic of the Negro; and it needs no scientific investigation to show why he selects as his hero the weakest and most harmless of all animals, and brings him out victorious in contests with the bear, the wolf, and the fox. It is not virtue that triumphs, but helplessness; it is not malice, but mischievous-

ness. (少くともそれは黒人の特徴を完全に示している寓話である。何故黒人が動物中で一番弱く無害なものをその主人公として選び、しかも熊、狼、狐との競争において兎に勝利を得させているかは、何ら学問的な探究を必要としない。勝利を得るのは、力にあらずして無力であり、悪意にあらずしていたずら氣である。)

この“helplessness”こそ奴隸の身につきまとつたものである。力は弱いが、そのためにこそ尚更必要な頭の銳敏さと気軽によつて、兎は数々の窮地をその智恵で見事に脱し、却つて相手を困難に陥れる。即ち helplessness が勝つのである。又その頭の銳さから来るいたずらも、時には相手を死に至らしめるが、そこには狐のような悪意ではなく humor が感じられる。

1880 年出版の Uncle Remus には、巻尾の Songs と Sayings を別として、Legends of the Old Plantation として三十四の物語が盛られている。これを Uncle Remus が一晩に一話ずつ七才になる男の子に話してきかせるという形式で書かれている。この男の子は、Remus が奴隸として使われていた頃の呼び名を今でもそのまま “Miss Sally” (「サリー嬢様」) と呼んでいる奥さんの息子である。話のつづきが聞き度くてじいやの小屋にとび込んで来ては、目を輝かしてじつと聴き、時々思わず話の先を促す子供らしい質問を發する男の子と、ゆつくりと落着いて自分が聞いたまま思い出すままに物語る年老いた黒人との様子が、実に目のあたり見えるように上手に写し出されている。これには Mark Twain さえ感心したと言われている。また、その物語の扱い方は変化に富み、一つ一つの話が短い劇の感じを与えており、その会話の妙味、諷刺的な意味はあつてもいや味のない点は、ユーモラスな慣用句を巧みに織り込んだ黒人英語のひびきと共に、この書物を特色づけるものである。

「リーマスじいや」の話は男の子にとつては、 “...whose nights with Uncle Remus were as entertaining as those Arabian ones of blessed memory, ...” と原文にある通り、アラビアン・ナイトのように心を楽しませるものであつた。Uncle Remus は、やさしい、正直な、まじめな、信心深い黒人の性質から出る数々の教訓を、物語の折々に男の子に与え、男の子の行いに批判的言葉を投げている。その教訓めいた言葉の中には中々うがつたものもあり、黒人らしい所が出ている。これもこの本の特徴であろう。長年仕えた主家の人々には今も尙忠僕としての気持ちを失はず、折にふれてその人達の名前を口にして男の子に話してきかせては、懐しんでいる。Uncle Remus が如何に主家に忠実であつたかは、この民話の後につけ加えられている A Story of the War の中に彼が語る南北戦争の折の話の中によく表わされている。主家の坊っちゃんの命を助けるためには、自分達黒人奴隸解放のために戦つてくれている北部の兵隊に思わず銃口を向けて傷つけてしまつたのである。そこには、主義、思想を超越して、幼い時からその腕に抱きお守りをした坊っちゃんに対する内親

にも近い愛情が脈々と流れているのである。

黒人が歌を好むことは周知のことであるが、Uncle Remus も男の子が訪ねて行く折等、「力強い豊かな声」で、不思議に物哀しい歌を歌つたりしている。またその歌声は、子供の心をしづかに和やかにして眠りに就かせることもある。この歌を好む心は、物語の中に、兎の歌、雀の歌、小鳥の歌、蛙の歌等となつて表われている。音に対して敏感な耳は、幾多の擬音を作り出して、物語に音の効果を添えている。Uncle Remus の雀のさえずりの真似が余りに上手なので男の子がもう一度聞かせてくれと頼む所がある程、その効果は大きい。蛙や亀の言葉として Uncle Remus がきかせる音、亀が水中に沈んで行く音、ノックの音等、数え上げれば沢山あるが、これらの擬音はこれを声に出して読んでもみると如何に巧みに表現されているかが分る。歌と擬音の他に、話し方に面白味を加えているのは、同じ言葉の上手な反復である。これは特に子供的好む点であろう。

このように、Uncle Remus の物語には、その内容の面白さ、表現の巧みさに於て独特のものがある。以上述べたこと以外に特に読んで印象に残るのは、この物語の中にある直喻の多さである。元来直喻は、話す内容を相手にはつきりと分らせるため、或いは誇張のためであるから、普通の会話にも屢々用いられるが、特に民話等には多く用いてある方が効果的である。直喻の中には、ありきたりのきまり文句と、その場合場合に応じて作られたものとある。Uncle Remus に見られる直喻は、前者に属するものは少く、後者に属するもので、しかも黒人独特のものがかなり多い。

次に、二、三の話を取り上げて、上記の要素がどのように表われているかを見ることとする。

童話として最も面白いと思われるは、映画にとられた The Wonderful Tar-Baby Story (「すばらしいタール坊物語」) であろう。男の子が或る晩はじめて Brer Rabbit と Brer Fox の話を Uncle Remus から聞き、その話のつづきが聞きたくて翌晩やつて来た時 Uncle Remus が物語ることになつているのが、この話であつて、この書物の二番目の物語である。

狐君、タールとテレピン油を混ぜ合わせ、人形を作り、“Tar-Baby”(タール坊)と名付け、広い表の路に座らせて待ち構えている。と、程なく、兎君、生意気な恰好して、ピヨンピヨコ、ピヨンピヨコやつて来る。

ここに、“lippity-clippity, clippity-lippity” という表現を用いて、兎が元気に得意気にはねながらやつて来る感じを上手に出している。後につづく物語の中でもこの言葉を使つてあるが、兎が “big road” (大通り) をやつて来る時に限つている。この言葉のすぐあとに、直喻として、“des ez sassy ez a jay-bird”=just as saucy as a jay-bird (丁度かしどりみたいに生意気に) と持つ

て来て効果を出している。

兎君、このタール坊見てびつくり仰天したかに、後足で立ち上つた。タール坊は知らん顔で座つてあり、狐君は身を低くしてかくれている。兎君、「おはよう」と挨拶しようが、「おまえはつんぽかい」と聞こうが、何と言おうが、タール坊はじいっと座つたまま一言も口をきかぬ。兎君は段々いらいらしてきて、遂にげんこをくらわすと、その手がくつき、又片方の手も振り上げておろすとそのままくつき、更に腹を立てて、両足、頭と、体当たりをくわしたため、身動きができなくなつてしまふ。その間、狐君はおかしいのをこらえて、低く低く身をかくしている。

このあたりの話の運び、兎の演じる一人舞台は、実にきびきびして面白く、思わず笑いを誘われる。同じ言葉の反復がこれ程巧みに用いられている所も少ない。Tar-Baby ain't sayin' nothin', en Brer Fox, he lay low."=Tar-Baby isn't (ここでは wasn't の意) saying nothing, and Brer Fox lay low. (タール坊は何も言わず、狐君は身を低くしてかくれた。) 一(方言、俗語でよく用いられる double negation は黒人英語にも見られる。) 一または, "Tar-Baby stay still, en Brer Fox, he lay low." (タール坊はじいっと動かず、狐君は低くなつてかくれた。) と、同様の表現を次々に十回位も繰り返し用いてあるが、これが非常に印象的で話を活かし、微笑ましさを添え、子供ならでも、上手な人に話してもらつたらと思う程である。

かくして、兎君、すつかりタール坊にくつついてしまつた時、狐君、やおら身を起し、のそのそ出て来た、何喰わぬ顔して。

ここに又直喻を用いて、聞いている男の子に狐の様子をありありと分らせるようにしている。即ち、"Den Brer Fox, he sa'ntered fort', lookin' des ez innercent ez one er yo' mammy's mockin'-birds."=Then Brer Fox sauntered forth, looking just as innocent as one of your mammy's mocking-birds. (それから、狐君、ぶらぶら出てきたよ、まるで坊っちゃんのママさんの飼つてなさるものまねどりみたいに、何も悪いことせぬといった顔してね。)

狐君、「今日は」とあいさつして後、地面をころげ廻つて、笑つた、笑つた、笑えなくなるまで。

と、このように兎と狐を対照し、狐が動けぬ兎を御飯に招待する所で、Uncle Remus は話をくる。そして灰の中から、いもを取り出す。男の子は、「狐、兎たべたの？」と話の終りがどうなるかを聞く。ところが、Uncle Remus は、「たべたかも分らず、たべなかつたかも分らず」といつた調子で話を終え、もうお母さんが呼んでいらつしやるのが聞えるから早く帰つたがよい、と寝る時刻を子供に思い出させる。これは屡々 Uncle Remus が話を区切り、子供をきちんと寝る時刻に帰す時に用いる手である。

このタール坊物語の結末は、間に一つ、 Why Mr. Possum Loves Peace (「ふくろねずみ君が平和を愛するわけ」) という別の話をした後、或る晩男の子がどうしても兎の運命が聞きたくてリーマスじいやに促すところで、始められる。Uncle Remus は促されてびつくりした風に、「未だそれ話さなかつたかね」と言つて、「わしの臉に「眠り」じいさんがのつかつて、もうちよつとでわしの名前も忘れるところだつた。そこへママさんが坊っちゃんを呼びにいらしたから」と、おかしそうにことわつて話をつづける。この話の題は How Mr. Rabbit was too Sharp for Mr. Fox (「兎君、狐君には手におえぬ」) となつてゐる。

狐君、散々笑いに笑つた揚句、兎君に言うことに、「今度こそつかまえたぞ。このあたりをはねまわり、とびまわりして、ボスだと思ひこみ、いつもいらん世話ばかりやいてたナ。誰がこのタール坊と友達になれって頼んだんだい。」そして、下生えの枝を積み上げ、火を燃して、兎君を丸焼きにすると言うに及んで、兎君、いやに下手(したで)にこう言つた。「君が僕をどうしようとかまわん。けどね、あのいばらのしげみの中には投げないでくれよ。丸焼きにしてくれていいよ。だけど、あのいばらのしげみには投げないでくれね。」

これを聞いて、狐は、火を燃すのは面倒だから首を吊るすことにしよう、とか、吊るす紐がないから水に溺れさせよう、とか、近くに水がないから皮をはがしてやろう、とか、次々に言つて、なんとか兎の一番つらいことをしてひどい目に合わせようと思う。その度毎に、兎は、どんなことをしてくれても皆結構だ。皮をはぐどころか、眼の玉をくりぬいても、両耳を根こそぎちぎつても、両足を切り取つてもいいから、どうか、どうか、あのいばらのしげみには投げ込まないでくれ、と頼みにたのむ。“Don't fling me in dat (=that) brier-patch.” を五回も繰り返す。この効果観面、狐君、兎君の後足ひつかむなり、いばらのやぶのまん真中へ放り投げた。

やぶの中、兎を投げ込んだあたりが、かなりザワザワする。狐君、何事が起るかと、立ち去らずにいる。やがて、誰かが自分を呼ぶ声がする。見ると、兎君、彼方の丘の上に、栗の丸太に足を組んで腰かけ、毛についたピツチ(瀝青)を木づばで落している。狐は、はじめて、自分が、反対に、してやられたことに気づく。

兎は、“bred en bawn (=born) in a brier-patch, Brer Fox—bred en bawn in a brier-patch! (いばらのやぶで生まれて育つたんだよ、狐君、いばらのやぶで生まれて育つたんだからね!) —(born and bred と言うのが普通であるが。) —と繰り返し、いつもの生意気な口をきくなり、「燃え残りの(灰の)中にいることおろぎのように元気よく」—“ez lively ez a cricket in de (=the) embers” —ピヨンピヨンはねて行つてしまひ。

この直喩は、as lively as a cricket というありきたりの句の後に，in the embers をつけたものである。

この物語には、反復、直喩が用いられていると同時に、一つの心理状態が描かれている。一番してほしいことを、しないでくれ、しないでくれと、反対のことを言つて、相手にさせるのである。兎の智恵が、相手を見抜き、まんまと成功する一例である。

さて、次に、Old Mr. Rabbit, he's a Good Fisherman (「兎のおじさん、魚釣が上手」)を取り上げてみよう。

その晩もまた話を聞きに来た男の子を、大層まじめくさつたふりをして眺めつつ、Uncle Remus はこう言つた。

“Brer Rabbit en Brer Fox wuz like some chilluns w'at I knows un. Bofe un um wuz allers after wunner nudder, a prankin' en a pester'n 'roun.” = Brer Rabbit and Brer Fox was (wereの意) like some children whom I know. Both of them was (=were) always after one another, pranking and pestering around. (兎君と狐君は、わしの知つてゐる子供衆みたいだつたよ。二人共いつもお互にあとを追ひ合つてね、いたずらしたり困らしたりばかりしている。)

この言葉の中には、男の子へそれとなく、悪ふざけをするな、と戒めている気持ちが見える。このように、Uncle Remus は折にふれて、子供をたしなめることを忘れない。その後で、物語は次のように話される。

ある日のこと、兎君、狐君、浣熊(あらいぐま)君、熊君、その他の連中が、畑を作るため開墾をしている。そのうち日が照つて暑くなり、兎は疲れて來たが、怠け者と言われるのを恐れて仕事をつづけていた。やがて、「手にいばらがささつた」と大声で言い、そつと抜け出して涼しい休み場所はないかと探しでいるところへひよつこり出た。

“Dat look cool, en cool I speck she is. I'll des 'bout git in dar en take a nap.” = That looks cool, and I expect it is cool. — (米国南部の俗語においては、無生物は女性に扱うことが多いので、この場合の she は「井戸」を受けている。) — I'll just get in there and take a nap. (あそこは涼しそうだ、きっと涼しいぞ。ちょっととあそこへはいつて昼寝をするとしよう。) と云うなり、飛び込んだ。身をおちつけるかつてぬうちに、つるべは降り始めた。

「兎、びつくりしなかつた、リーマスじいや？」と男の子は尋ねる。「世界始まつてこのかた、この時のこの兎君位 びつくりしたけものはいなかつたね、坊っちゃん、外から飛び込んだことは分つていたが、これからどこへ行くのやら分らん。」云々と答えて、忽ちつるべが水にあたつて止まり、次の瞬間はどうなることかとみじろぎもせず震えている兎の様子を Remus は述べる。

いつも兎から目を離さなかつた狐は、この時もそつと兎の後をつけ、兎が井戸のところへ来たのも見ていた。

兎君、つるべに飛び込むと、こは如何に、下へと降りて姿が見えなくなつた。狐君、びつくり仰天。そこの繁みに腰をおろし、考えに考えた。が、さつぱり何のことやら分らない。それから独りごと、「あの井戸の下に兎君お金をかくしてゐるんだな。もしそうでなきや、金鉱を発見したんだ。そうでなきや、あすこん中に何があるか見に行こう。」—(十九世紀の半ば、アメリカでは所謂“gold-rush”で、カリフォルニアの金鉱を目指して大勢の人がどつと西部へ行つたことを思い合わせると面白い。)一そして狐は井戸の近くへ忍び寄り、聴き耳を立てるが、何の物音も聞えぬ、更に近づけど、しいーんとしている。やがてすぐ近くへ寄り覗き込んで、何も見えず、何も聞えぬ。

一方、兎はもう生きた心地もせず、つるべがひつくり返つて水の中へ落されると大変と、身動きもできずにいる。「まるで汽車のように」長い長いお祈りの言葉を繰り返していると、狐のおじさん大声で、「オーイ、兎君！ そこんとこで誰を訪問してゐるんだい？」ととなる。

“W'ile he sayin' his pra'rs over like a train er kyars runnin', ...”= While he was saying his prayers over like a train of cars running,... というこの直訳は如何にも子供に分りそうで面白い。

その声を聞いて、「誰？ わしか？ あゝ、ちょっとさかなを釣つてゐるんだよ、さかなの御馳走して皆をアッと言わせようと思つてね」といつたあんばいで、兎は忽ち持ち前の気軒で狐の気持ちを動かし始める。

狐は、魚が沢山いるかと尋ね、「いるとも、いるとも、降りてさかなを引上げるのを手伝つてくれ」との答につられ、兎の楽しそうな話にひかれて、言われた通り、つるべに飛び込む。狐の重みで兎はつるべと引上げられ、丁度上と下との中程で狐とすれちがつた時、兎君、次の歌をうたう。

“Good-by, Brer Fox, take keer yo' cloze,
Fer dis-is de way de worril goes;
Some goes up en some goes down,
You'll git ter de bottom all safe en soun.'”

= Good-by, Brer Fox, take good care of yourself,
For this is the way the world goes;
Some go up and some go down,
You'll get to the bottom all safe and sound.
(さよなら、狐君、おだいじにね、
これが浮世のならいさ、ね、

上る者もあれば、下りる者もあるさ、
君は大丈夫底まで行くさ。)

兎君、井戸から出ると大急ぎ、井戸の所有者のところへ行き、狐が井戸の中へはいつて飲み水を濁していると告げ、さて又とつて返して井戸の中の狐にどなるには、

“Yer come a man wid a great big gun—
W'en he haul you up, you jump en run.”

=Here comes a man with a very big gun—
When he hauls you up, you jump and run.
(大きな鉄砲もつて人間が来るよ—
引っぱり上げられたら跳んで逃げよ。)

「それからどうしたの？ リーマスじいや？」と男の子が尋ねる。ここでリーマスが話を止めたので。

「半時間ばかりたつとね、坊っちゃん、二人共、新たに開墾してる畠へもどつて働いてた。まるで井戸のことなんて聞いたこともないというふうにね。たゞ時折、兎君は思わず吹き出してしまい、狐のおじさんは面白くもないふうにちよつと苦笑いをするにはしたが。」

これでこの物語は終つている。上に引用したように、この中には歌があり、その歌は一行目と二行目は cloze, goes と、三行目と四行目は down, sound と、脚韻を踏んでいる。(～ね、～さ、で訳してみた。) 内容も中々うがつたことを兎に言わせている。更に、兎が井戸の中の狐にどなる言葉も二行であるが、gun, run. と韻を踏ませ、音の効果を出している。話の終りも、兎と狐の様子が目に見えるように対照して話されている所、実に巧みなものである。

その大要を書いたこれらの物語の他に、次に列挙する物語は種々の点で興味深いものである。

The Story of the Deluge (『大洪水の話』) 一有名なノアの洪水の物語とは全然異なる話であるが、自分勝手なことをするものがあるので洪水が起つたという点は似ている。

Mr. Fox is “outdone” by Mr. Buzzard (『狐君、禿鷹君にしてやられる』) —兎でなく、他のものに狐がやられる例。

Mr. Rabbit finds his Match at last (『兎君、遂に好敵手を見出す』) —これは兎と亀の競争の話で、日本のとは随分ちがうが、兎が亀に負ける点だけは似ている。中々面白い。

How Mr. Rabbit lost his Fine Bushy Tail (『兎君、その立派なフサフサしたしつぽをなくすに至る』) —この話はドイツ等では、主人公が兎でなく熊になつ

ている。

黒人の間に伝わつてゐる迷信的な話としては、A Plantation Witch（「農園の魔法使」）；Jack-my-Lantern（「人魂」）等がある。

最後に、The Sad Fate of Mr. Fox「狐君の悲しき最後」で、Uncle Remus の物語は終る。この話の終りに、Uncle Remus は子供が眠そうにしているのを見て、「坊っちゃんをここからおうちまでおんぶして行けない程、まだじいやは老いぼれてもいないと思いますよ。幾度も幾度もジエームズおじさんをおんぶしたものですよ、ジエームズ坊っちゃんは今の坊っちゃんより重たかつたけどね」と結んでいる。今は一人前の壯者になつてゐるが、Remus が昔そのお守りをし、その人の命を救うために北部の兵隊に敢えて銃を向いた、男の子のおじに当る、主家の息子 James を、Uncle Remus はこのように偲ぶのである。

尙、序に、この傷ついた北部の兵隊は、「サリー嬢様」とリーマスじいやに介抱され、後に「サリー嬢様」と結婚したこと、その失われた片腕の代りにリーマスじいやは自分のたくましい両腕をもつて彼に仕えたことなどは、A Story of the War の中で Uncle Remus が語つてゐる。従つて、この話によれば、傷ついたこの兵隊は、男の子の父親になるわけである。

Uncle Remus は全篇、黒人の面目躍如として、大人の中にひそむ童心にも訴えるものがある。

尙、黒人用語の訛りについて述べるとすれば、まだ書かねばならない事が多いが、それは又次の機会に譲ることにする。

(本学講師)